

私立大学研究ブランディング事業

令和元年度の進捗状況

学校法人番号	131085	学校法人名	法政大学		
大学名	法政大学				
事業名	江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	25,715人
参画組織	国際日本学研究所、エコ地域デザイン研究センター、文学部、デザイン工学部、法学部、経済学部、社会学部、国際文化学部、人間環境学部、現代福祉学部、キャリアデザイン学部、理工学部				
事業概要	江戸東京に蓄積され現在にも生きる固有の自然・歴史・文化・人的資源の発掘と再評価を通じて、この都市が文化的・空間的に持続している理由を解明し、そこから持続可能な地球社会を構築するための方法と理論とを導き出す。その知見を地球社会の諸課題を解決する〈実践知〉として育み広める教育研究拠点(仮称)「江戸東京研究センター」を設立し、日本文化の国際的発信者としての法政大学のブランドイメージを確立し展開する。				
①事業目的	本事業の目的は、地球社会の課題解決に向けた知の創出と自立的な市民の育成によって世界の持続可能性に貢献することを謳う〈法政大学憲章〉に則り、持続可能な社会(都市)のあり方を、江戸東京をモデルに、エコ地域デザイン研究センター(理系)と国際日本学研究所(文系)が連携し、学際的な研究体制のもとで国際的な視座・視点も加えながら探求することである。				
②令和元年度の実施目標及び実施計画	<p>◆事業全体及びブランディング事業</p> <p>「江戸東京の社会的・文化的特徴に関する研究の深化と〈実践知〉を生かした市民・一般参加の拡大」</p> <p>①前年度よりも広範な市民・一般参加拡大</p> <p>②都市空間の特性に関する重点シンポジウムの開催</p> <p>◆水都ー基層構造プロジェクト</p> <p>都市と地域のテリトリーと文化的景観に焦点を当てて研究を進める</p> <p>◆江戸東京の「ユニークさ」プロジェクト</p> <p>近世から近代への過渡的な都市の状況に注目し「武都から帝都へ」をテーマとした研究活動</p> <p>前年度の名所研究を継承した書籍の刊行や地図作成</p> <p>◆テクノロジーとアートプロジェクト</p> <p>テクノロジーとアートが東京でいかに生かされているかを追究</p> <p>研究会を通じてテーマの広がりをつかむ</p> <p>◆都市東京の近未来プロジェクト</p> <p>国際研究ネットワークの構築、プロジェクトサイトの策定、行政とまちづくりの連携研究</p>				
③令和元年度の事業成果	<p>◆事業全体及びブランディング事業</p> <p>①シンポジウム・研究会の開催</p> <p>全36回のシンポジウム・研究会を開催しそのほとんどを一般市民にも公開し、のべ参加者数は約2900人に上った。都市空間の特性に関する重点シンポジウムとして「東京は首都たりうるか 大都市病候群」を開催したうえ、国際シンポジウム「水の都市としての東京とヴェネチア」をイタリアで実施、いずれも成功をおさめることができた。</p> <p>②地域連携活動</p> <p>地域連携活動として外濠浚渫工事見学会を実施したほか、佐原アカデミア、東京文化資源会議と研究会を開催し連携を深めることができた。</p> <p>③市民向け教育活動</p> <p>「履修証明プログラム 江戸東京を学ぶ」コースを2種設け、市民に対する教育活動を行ったほか、神田明神において「江戸東京文化講座」を8回開催した。</p> <p>④著作物の刊行</p> <p>江戸東京研究センター叢書第2弾「風土(FUDO)から江戸東京へ」を刊行した。その他、センター編著・監修等の著作物6点、研究員の著作物14点、論文17、学会発表21回等の成果をあげることができた。</p> <p>◆水都ー基礎構造プロジェクト</p> <p>国内外を対象テーマにした水のテリトリーに関する国際シンポジウムをヴェネチアにて開催し、江戸東京の地形や水辺に関する国内シンポジウム及び研究会を16回開催した。書籍及び報告書を4冊発行したほか、一般学生及び社会人を対象とした講義・プログラムを6件実施した。実施計画はほぼ滞りなくすすめることができた。</p> <p>◆江戸東京の「ユニークさ」プロジェクト</p> <p>新たな研究テーマ「武都から帝都へ」を掲げ、研究会2回、シンポジウムを3回開催したが、コロナ禍により研究会1回が開催できず延期となった。昨年度までの研究活動から導かれたキーワード「追憶」が評価され、書籍「好古趣味の歴史」の刊行準備を進めた。来年度早々に発刊の予定である。実施計画はほぼ滞りなくすすめることができた。</p>				

	<p>◆テクノロジーとアートプロジェクト 昨年度はファイン・アート関係の企画が多かったため、今年度は周辺のアートに関するものを目指し、4回の研究会を開催することができた。パブリックアートに関するシンポジウムを1回予定していたが、コロナ禍によって延期となった。「江戸東京のユニークさ」プロジェクトと合同で開催した2018年度シンポジウムの内容をまとめた叢書『風土(Fudo)から江戸東京へ』を刊行し、同じく2018年度の研究会の内容をまとめた報告書「テクノロジーと東京」も発行することができた。実施計画はほぼ滞りなくすすめることができた。</p> <p>◆都市東京の近未来プロジェクト 5/19に国際的なネットワークを持つ建築家磯崎新氏を招聘し、「東京は首都足りうるか」というテーマのシンポジウムを700名を超える聴衆を得て開催した。さらに10/1から12/3にかけて、上記の「東京は首都足りうるか」という問いかけを解題するように全7回のシリーズレクチャーを開催した。また、一昨年開催した国際ワークショップの内容を再編し、書籍『江戸東京の都市組織に挑む』を彰国社より刊行した。「国際的研究ネットワークの構築および行政とまちづくりの連携研究」という計画をほぼ滞りなくすすめることができた。</p>
<p>④令和元年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価) 2019年度の活動について、おおむねS評価(当初の目標・計画を大幅に上回っている)またはA評価(当初の目標・計画を上回っている)が多かった。しかし、予算減とコロナ禍に見舞われ実現できなかった事項もあり、B評価(当初の目標・計画をおおむね達成している)を受けた項目については真摯にうけとめる必要がある。研究計画の一貫性、研究者自身による本質的な目標設定を求める意見もあった。</p> <p>(外部評価) 今年度は評価委員の安全を考え、対面による外部評価委員会のかわりに書面による意見聴取を行った。委員からは2019年度の活動各項目について、SからBまでの評価を得ることができ、C評価(当初の目標・計画を下回っている)の項目は無かった。ただし、「外部評価は会談の方がよい」という意見がよせられた。</p>
<p>⑤令和元年度の補助金の使用状況</p>	<p>令和元年度事業予算の執行にあたっては、「私立大学研究ブランディング事業計画書」に基づく事業の実施に直接必要な経費を、補助要件及び学内規程を遵守しつつ下記内容のとおり執行した。</p> <p>【研究費】叢書及び研究報告書等制作費、研究・調査・学会出張旅費、研究用ワークステーション費及び資料費、研究用資料電子化費用、等。</p> <p>【広報普及費】シンポジウム・研究会・ワークショップ等開催費、江戸東京研究センターパンフレット vol.3(私立大学研究ブランディング事業2019年度事業報告書)制作費、私立大学研究ブランディング事業 兼 江戸東京研究センターwebサイト運用保守・改修費、等。</p> <p>【その他経費】研究補助者及びRAに係る費用、外部評価に係る費用、江戸東京研究センター運営委員会実施費用、等。</p>